
俺の初恋

翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の初恋

【Zコード】

N7269A

【作者名】

翼

【あらすじ】

俺の生まれて初めての大切な大切な、恋のお話です。大好きな有奈に向けて、俺の精一杯の気持ちです。

第一話

僕は、長尾憲輔。

一応、学生をしている。

僕の斜め前に座っている女の子。

名前は中里有奈。最近僕が気になつていてる口だ。
いや、気になるというかぶつっちゃけ好きな口だ。
この恋は僕にとっての初恋だ。

だから、当然どうやって近づけば良いのか、とか全然分からぬ。
とりあえずは友達にでもなつてみようと思つたが、有奈はいつも
女子たちと一緒にいる。

だけど、チャンスは意外と早くやつてきた。

「あ、そうだ。ねえ、長尾君。あたしたち、明日カラオケ行くんだ
けど一緒に行かない？」

「カラオケ？うん、いいよ

平静を装つてはいるが、心拍数はゆうに100を超えているだろう。
「そういえば、話すのってこれが初めてだね。これからよろしくね」
有奈はそう言って、にっこりと笑つた。

可愛い。可愛いすぎる。

ヤバイ。多分、僕今、顔赤い。

やっぱり、僕・・・有奈が好きだ。

すげー。やっぱじこれって恋なんだなあ・・・。

もうすでに気が付いていたこと。ただ、誰にも言えなかつた事。

カラオケ当日。

「憲輔、ちょっと用があるんだけど。」

「こいつは、後藤田 雅美。
ロトウダ ハヤヒ

同じクラスで、同じ部活。男勝りな性格で、僕がよく有奈について相談する人物だ。

「何？」

「お前、有奈と一人つきりになりたいとは思わんか？」「え・・・ま、まあそりやなあ・・・」

「じゃあ、あたしに良い考えがある」

そう言いつと、雅美はにやりと笑った。

その言葉がなければ・・・。

この状況はなかつただろう。

「遅いね？他の人たち」

「そ、そうだね！！」

来るわけ無いんだよ、有奈・・・。

ポケットに突っ込まれた僕の手に握られているのは、雅美からのメールが表示された携帯。

メールの内容はと言いつと、

『憲輔へ

実はカラオケって昨日だつたんだよね！

それ知らないの、アンタと有奈だけだから。

つまりイ、今日のカラオケってアンタと有奈の一人つきりつてわけつてことで、頑張れよ！

ps .

カラオケって予約してあるから、行かなかつたらマジで許さないよ。』

この状況は正直おいしい。でも・・・でもつー！一人つきりは気まずい！！

でも、いかないわけにもいかない・・・いけつ！僕！！

「さ、先に行かない？」

・・・・・・・・・・・・

しばしの沈黙・・・。

「そうだね、行こつか！」

有奈は眩しいほどの笑顔でそう答えてくれた。

ああ、もう・・・死んで良いかも・・・。

第一話（後書き）

初めてこの名前での投稿です。
たくさん的人に読んでもらえればと思います。

第一話

今日、一人でカラオケに来て、分かつたこと。

1、有奈は結構、音痴だといつこと。

2、やっぱり有奈は可愛い。

3、意外と僕、歌うまいかも・・・？

有奈の声は可愛らしさソプラノで、僕の声はちょっと高めのアルトだ。

友達からは高い声と言われるが、そんなに高いか・・・？

カラオケに来てから、約2時間が経過した。

お互に10曲近く歌ったのではないだろうか。

スナック菓子やドリンクを飲み食いしながら、会話も結構した。

有奈ももう誰も来ないことを気にしていないようで、普通に楽しんでいる。

僕ももちろん楽しい。

邪魔されることなく有奈と一人つきりでカラオケが出来るのだから。

有奈は今、一番好きといつアーティストの曲を歌っている。

僕は全く知らないアーティストだが、歌いながら上目使いで見てくる有奈があまりにも可愛くて思わずクラッとした。

曲は長い長い間奏に入ったようだ。

僕の心臓の音がどんどん大きくなつていった。

僕って、本当に有奈の子と好きなんだなあ、と実感しつつ、

「そういえば、」

声が裏返りながら、ずっと僕を見つめていた有奈に話しかける。

「僕なんかに「くん」なんてつけなくて良いよ。」

「そんなわけにはいかないよ。」

有奈が、可愛いソプラノの声で返事をした。

「いや、別に僕も呼び捨てにするし。ていうか、呼び捨てにしたもうらつたほうが嬉しいし……。」

「なんで？」

思わず発していた僕の本音はしつかり有奈の耳に入っていた。
僕は、自分の口から出た言葉に動搖しながら、顔を真っ赤にして下を向く。

せっかく、有奈にこの顔を見られないよ^{アリ}こと下を向いたのに、有奈がいきなり覗き込んできた。

有奈が、潤んだ瞳で見てきた。こう見ると、有奈がか弱い小動物のように見えてくる。

「よそよそしいのって嫌いなんだよね。」

思わずそっけない言葉が、口から出ていた。

有奈は一瞬悲しそうな顔をしてから、また笑顔になった。

「そんなことで、照れてたらダメだよ。私のことも呼び捨てで良いよ、憲輔。」

有奈に初めて名前で呼ばれた。それがまたうれしくて、顔が赤くなつていく。

「・・・わかった、有奈。」

俺たちは、一人で笑いあつた。まるで、恋人同士のよ^{アリ}。

でも、一瞬でも有奈に悲しい顔をさせてしまった自分自身が憎かつた。

それだけが、今日の僕の出来事でやり直したい時間であった。

一瞬でも、君には悲しい思いをしてほしくない。

例え、僕がどんなに傷ついても……。

第一話（後書き）

この小説は私ともう一人のある先生との共同制作小説です。感想や評価をいただけたら、嬉しいです。

有奈と僕はあの日、結局あの後も2時間ほど歌つてから、カラオケボックスを後にした。

有奈を傷つけてしまったのは、その後もずっと気がかりだったが、有奈の笑顔を見ているといい、僕も笑顔になる。悲しい気持ちは楽しくて、嬉しい気持ちになる。

カラオケボックスを出ると、外は当然のように真っ暗で、僕は家まで送ると言った。

それに対して、有奈は、

「そんな、悪いからいいよ。一人で帰れるよ」

と言った。

でも、どうしても心配だった僕は無理やりのよつた形で送ることにした。

有奈の家は閑静な住宅地にあった。

二階建ての白い一軒家で、庭には白い毛の仔犬がいた。

「わざわざ『』メンね。送つてくれて有難う」

有奈は再び笑顔でそう言った。

「こちらこそゴメンね。こんな遅くまで・・・」

「ううん、いいんだ。すごく楽しかったし・・・」

「そう。それなら良かつた。じゃあ、また明日学校で」

僕はそう言って、背中に有奈の視線を感じながら帰路についた。自然に話せていただろうか。顔は引き攣つていなかつただろうか。

一日一緒にいたはずなのに、まだ緊張する。

二人でカラオケなんて終わつてしまつてからじや、夢のように思つ。でも、僕の頭の中には有奈が見せたひとつひとつの表情がしつかりと残つていた。

彼女のひとつひとつの表情に恋してしまつ僕はやつぱり有奈のことが・・・どうしようもないくらい好きだ。

有奈と僕の気持ちがひとつなら、どんなにいいだろう。
きっと、そんなことはありえないと思つけど。

第四話・有奈視点

- 有奈編 -

私は、最近ある人物に恋をしている。

彼はつい最近、一ヶ月ぐらい前までは、名前しか知らなかつた人だ。
長尾憲輔くん。身長がものすごく高くて私は彼を見るたびに、
「並んで帰るときとか大変そうだな。」

と、勝手に考えている。

その憲輔君と、最近カラオケに行つた。

私は、友達にも言われるほど音痴だ。

それに比べて、憲輔君はものすごく上手だった。

私は思わず憲輔君に見惚れていたようだ。

そんな所を、彼に見られていなくて良かつた。

見られていたら、恥ずかしすぎて死んでしまうかもしない。

彼と目が合つたり、会話をしたりする時点で、ものすごく緊張しているのに・・・。

こんな思いをしたのは初恋以来・・・ううん、初恋のときもここまで緊張しなかつた・・・。

カラオケに行つて、私が嬉しかつたこと。

彼が憲輔って呼び捨てにしていいって言つてくれたこと。

そして、彼が私を家に送つてくれたこと。

やつぱり優しいな、憲輔・・・つて。

彼といふと、幸せであつたかくて・・・。

憲輔は優しくて、気さくですごく良い人。

私は最近、気がつけば憲輔といつしょにいる想像ばかりしている。

私の想像の中では、私と憲輔はすごくラブラブなカップル。

現実に引き戻されたたびに私はまた想像か、と肩を落とす日々が続いている。

雅美とかには、もうそれは妄想の域だろつと叫われるが、さすがにそれは認めたくない。

。 だって、想像ならまだしも・・・妄想はさすがにヤバイ、かな・・・

でも、恋をすると人はおかしくなっちゃうものだと思うから。

そんなに悪い気はしないかな。

まだこの気持ちを伝えることはできないと思つけど、彼とほんの少しの会話ができるだけで、田が合つだけで今は十分、幸せだから。ラブラブなカップルになりたいだなんてワガママな気持ちは隠しておこうっと。

でも、きっと私は憲輔の彼女になつてやるんだから。

“憲輔が好き”

これだけは誰にも負けない私の気持ち。

第五話

最近、僕は調子に乗っていると思う。だって、有奈の仕草一つ一つに期待をしてしまつ。

僕の事好きなのかと。

最近、二人でいる時間が増えた。
休み時間も、給食も、帰る時だって一緒に。
しかも、お互いのメールアドレスも知っている。
学校帰りに、一人だけで遊びに行つた事はもう数えられないほど。
メールもほぼ毎日している。

一緒に遊んでいる間、有奈も楽しそうだ。

こんな表情の有奈を見て期待しないほうがおかしい。
でも、こんな風に遊んでいると改めて実感する。

僕は、有奈が大好きだという事。

「なあ有奈、そういうえば誕生日つていつ？」

いつもの店に、いつもの学生服の格好で話していた。

「私？私はねえ、8月10日！」

「夏休み中か・・・なにが欲しい？」

言つた。言つてしまつた。当然のように・・・。

少し、馴れ馴れしかつた、かな・・・？

僕はそつと有奈の顔を盗み見た。

すると、偶然目が合つてしまつた。

や、ヤバ・・・。

冷や汗が僕の頬を流れた。

有奈は嬉しそうな声で言つた。

「プレゼントくれるの？」

と。

良かつた・・・。図々しい奴だとか思われなかつたみたいだ。
しかも、夏休みに必ず一日は会える。

「あげるよ。だから、なにがほしい？」

「そうだねえ・・・アクセサリーとかかな？」

「そつか。分かつた」

アクセサリー？・・・アクセサリーって言つたら指輪とか？
指輪、あげるのってなんかトクベツな感じがするんだけど・・・。
どうしよう・・・。

「憲輔、夏休みはどうしようか？」

「夏休み？そりいえば、もう明後日から夏休みか・・・」

「そう。一緒に海でも行こうよ」

「海？いいよ。だつたら、映画にも付き合つてくれない？見たい映
画あるんだ」

「もちろん。どんなの？」

「えっとね・・・」

会話は続き、気がついたら外は真っ暗。

夏休みの半分以上、有奈といふ約束をしてしまつた。
しかも、海にも一緒に行ける。

僕たちつて傍から見たら、恋人同士に見えるのかな・・・。

「もうそろそろ帰らなきやね・・・。憲輔、送つてくれる？」

「当たり前」

「ありがと」

有奈は本当によく笑う。

同じ“笑う”でも、それぞれ微妙に違ひがある。

そんなひとつひとつの笑顔が愛しくて、愛しくてたまらないんだ。

「送ってくれて、ありがとう」「

「いえいえ。じゃあ、また明日学校で」

「うん。バイバイ」

そう言つて、僕はその場を後にした。

振り返ると、有奈は僕が見えなくなるまで手を振つてくれていた。
笑顔で。優しい優しい笑顔で。

僕は決めた。

夏休み、8月10日、有奈の誕生日に僕は指輪をプレゼントして、
有奈に告白する。

第六話

今日は、妹と雅美と一緒に有奈の誕生日プレゼントを買に来ている。

「お兄ちゃん、その彼女さんどんな人?」

「ちよつ、紗希。有奈は、まだ僕の彼女じゃない……！」

「まだ? つてことは、お兄ちゃんは彼女になつてほしつて事じやん。」

なかなか鋭い妹。

「本当にお前と血が繋がっているのか?」

これは、雅美。

妹の紗希は年齢のわりにかなりしつかりしている。
自己判断がすぱっとできるタイプだ。

きびきびしてて、リーダー気質がある。

それに比べて、僕は……。

雅美にそう言われるのも無理はないと思つ。
結構、顔は似てると思うんだけどなあ……。

「それでお兄ちゃん、その『有奈』さん? つてどんな人? ?」

「有奈は・・・小さくて、可愛くて思わず守つてあげたくなる、そんな子だよ」

「ベタ惚れだね・・・お兄ちゃん」

「・・・うん」

「そんなに好きなら何でさつわと知りしなかったの? チャンスはいくらでもあつたでしょ? 一緒に帰つたりもしてたみたいだし・・・」

「け、決心がつかなかつたんだよ? ……」

「青春、だな」

雅美がニヤニヤしながら言つてきた。

そんなときだつた。

「あれ？ 憲輔？」

有奈の可愛らしい俺を呼ぶ声が聞こえたのは。
どきんと心臓が跳ね上がる。

視界の端に見えるのは、相変わらずニヤニヤした雅美と観察するよ
うにじつと有奈を見詰める紗希がいた。
何とか硬直した身体を動かして、有奈に向かいつと有奈はこつこつ
と笑っていた。

そして、その隣には同性の僕から見てもカッコイイ男の人人が立つて
いた。
さつままでのドキドキが馬鹿みたいに思えてきた。

第六話（後書き）

かなり久々の投稿です。

これからはもっと頻繁に投稿していきたいと思います。

憲輔 side

「何してゐるの？」となどこで」

有奈の言葉に返事を返すことができない。

今はあんなに大好きな有奈の顔すら見たくない。

気がつけば、僕は走り出していた。

有奈 side

「ちょっと、憲輔っ？！」

慌てて、彼の名を呼んだ。

でも、彼は黙つて走つていつてしまつた。

「どうしたんだろう・・・」

「ま、俺が原因だろうな」

「えっ？！憲輔になにしたの？！」

お兄ちゃんに対して、こんなに声を荒げたのは初めてだつた。

お兄ちゃんもびっくりしたみたいだつたけど、すぐにいつもの涼し

い顔に戻つた。

「お前、気付いてないのか？」

「無理ですよ、有奈はそういうところ鈍いですから」

鈍いって・・・なにが？

雅美は何か知つてるの？

「ああ、雅美ちゃんつづつたつけか？」

「そうです。お久しぶりですね」

「おつ。元氣にしてたか？」

「ハイ。そちらもお元氣そつで」

「ちょっとすみません」

見知らぬ女の子がお兄ちゃんと雅美の会話に加わつた。
初対面なのに、なぜかとても親近感が沸いた。

「何となく分かるんですけど、うちのお兄ちゃん勘違こしちゃつて
るみたいですね」

「やーつぱり紗希ちゃんは勘が鋭いわねえ。それに比べて、憲輔と
きたら……」

うちのお兄ちゃんつてことは……。

「ねえ、雅美。この子は？」

私が会話に入ると、その女の子が私の方を見て、ペコっとお辞儀し
た。

「初めまして。長尾 紗希と聞こます。もうお分かりだと思こます
が、

あの憲輔の妹です」「
やつぱり……。

すじく礼儀正しくて良い子だなあ……。

「あ、私は……」

自己紹介をしようとするとい、それを紗希ちゃん（でいいのかな？）
に遮られた。

「知ります。有奈さん、ですよね。いきなりで本当に申し訳ない
んですけど、

お兄ちゃん追っかけてあげてくれませんか？私たちじやどつこもな
らないと思つんで

「あつ、うん！」

私は頷いて、憲輔を追つて走り出した。

紗希 side

「紗希ちゃん、だけ？すごいね、テキパキして」
有奈さんと一緒に居た男の人と話しかけてきた。

おそれくこの人は……。

「そんなことないです。ただこりでもしないと、お兄ちゃんたちつ
てくつつけないとと思うから」「

「そうだね。君、いくつ？」

「中学一年生、13歳です」

「そう。俺は高2なんだけど、俺君みたいな子、好きだよ」

「は？」

何言つてるんだろ？。この人。

「ちょっと、ナンパはやめてください。紗希ちゃんはあなたには勿体無いです」

雅美さんが間に入ってくれた。

「ひどいなあ、結構俺、本気なんだけど？」

確かに目が本気だ・・・。

「はいはい。とりあえず紗希ちゃんに自己紹介してあげてくれませんか？」

またもや雅美さんが助け舟を出してくれた。

本当は私は雅美さんにお義姉ちゃんになつてほしかったけど、見た限りじゃ有奈さんも良い人そうだし・・・。

「ああ、ごめんね。俺は中里 晃輔。ナカザム ハウスケ」「ウツヒト呼んでよ。

そこで、有奈の兄貴です。君のお兄さんはなんか誤解してるっぽいけどね~」

「ほんと、しょうがないんだから・・・」

私はそう言つて、ため息を吐きながら、二人が上手くいくことを願つた。

第七話（後書き）

憲輔の妹ちゃんと有奈のお兄さんの登場です。

一話に3人の視点つて少し無理がありましたかね・・・。

とりあえず、コウさんは妹ちゃんが気に入ったみたいですね。この二人がどうなるのかは書こうかと検討中です。その辺の意見も含めて、感想などをいただけたら嬉しいです。

第八話

「はあ、どうしようつ・・・。」

デパートの屋上の自動販売機の前のベンチで、幸せそうな親子を見つつ僕の中でもさつき見た光景が何度も何度も頭の中をよぎる。

あの隣にいた男の人は誰なんだ？

年上の彼氏か？？

男友達か？？

僕みたいな友達がたくさんいるのかなあ・・・。

僕だけじゃなかつたのかなあ・・・。

やっぱり僕の自惚れだつたのかなあ・・・。

軽い自己嫌悪に落ちいつていると、突然僕の名前を呼ぶ声がした。

「憲輔！」

今、一番会いたくない人。

僕をぐちゃぐちゃにしていく人。

「有奈・・・。」

走ってきたのだろう。息を整えようと深呼吸をしている。

「何で追ってきたんだよ！」

ああなんてかっこ悪いんだろ？、僕。

有奈は何も悪くないのに、ハツ当たりするなんて。
僕がただ勘違いしていただけなのに・・・。

「えっ、だつて憲輔が私とおにいちゃん見た途端走り出すから、びっくりしちゃって・・・。

思わず追いかけた。」

そう言葉を紡ぐ彼女の仕草一つ一つがまた可愛くて、今なんで怒つていたのかも忘れてしまっていた。

ん？さつき有奈の言葉の中に『お兄ちゃん』という単語が出てこなかつたつけ？
え？

「お兄ちゃん？！」

有奈はいきなり僕が話しう出したからビックリしたのだろう。目を大きく見開き後ろによろめいていた。

「そうだよ、私は今日お兄ちゃんと一緒に買い物に来ていたんだよ。そこで憲輔に会ったから 嬉しくて声をかけたのに、驚いた顔をして走り出すんだもん。本当にビックリした。」

有奈の隣に居たあの男の人があ兄ちゃんだと知り安心したのだが、あることを思い出し僕の
顔から急速に血が引いていくのが分かった。

「憲輔顔色悪いよ、大丈夫？」

有奈が心配してくれている。

普通だつたら、とても嬉しい状況なのだが今の僕にはそれを嬉しがる余裕が無かつた。

だつて、僕は有奈のお兄さんに挨拶もせずにきなり背を向け走り出したのだから。

失礼すぎる、僕がこんな風にされたらものすごいショックを受けるだろう。

その人が自分の妹の彼氏にでもなつたら……。
やばい、本当にやばい。謝りに行かなきや。

僕は、デパートの中へと続く階段へと走り出でたとしていた。

ところが……。

「ちょっと待って、憲輔。」

有奈が僕の洋服の裾を掴み、呼びかける。

「ちよっと、ここで話していかない？」

いきなりのお誘い。嬉しい、嬉しいのだが。
今は、それどころじゃない。

お兄さんに挨拶しなきゃいけないのに……。

「いや、お兄さんに挨拶をしなくひや……。」

いかにも挙動不審な態度を取る僕に有奈は疑いの眼差しを向ける。

「じゃ、一つだけ教えて。」

有奈の口が、僕への質問を紡ぐ。

「私のこと、どう思っているの？」

僕は、すぐ言葉を発することができなかつた。

言ってしまった・・・。

私は、深く深く後悔した。

年でこんなことを口にしたのかは分からなかつたが

「お兄さんに挨拶に行く」

つて言つた憲輔の顔があまりにも真剣で、本当に私をお嫁にもらつていきそうな勢いだつたから、ちょっと期待してしまつたのかもしない。

でも憲輔は、すぐに答えを返してくれなかつた。

そのことに、私は傷ついた。

「こんなにも好きなんだ。」

改めて、実感した。

私は最初、憲輔を好きだと思いたくなかった。

そう思うことが怖かつた。

私は足は、階段へと走り始めていた。

そう思うと、涙がこぼれた。

私だけが・・・。

恥ずかしい。

もう、ここに居たくない。

「待つて。ちゃんと、俺の気持ち聞いて。」

憲輔が私の腕を掴んで、言つた言葉。

彼の一言、一言にいちいち反応してしまつ自分がいる。この言葉にも、期待してしまつていて自分が多い。

嘘じやない事を信じて。

「私も。・・・好き。」
聞き間違いかと、思つた。
ずっと下を向いていた僕だが、ゆっくりと彼女の顔を見る。

「好きだ。」
たつた一言。どれだけ、伝えたかつたか。
そして、彼女からどれだけ言われたいと思ったか。
僕は、静かに彼女の返事を待つ。

思わず、呼び止めてしまった。
しかも、「俺」だなんて。
「俺」なんて、僕には大人すぎる気がして、同級生が「僕」と言わ
なくなつても
僕で、通していたのに。
新しい「恋」という感情を持つた今、僕は大人になれた気がした。
そして、この思いを彼女に伝えるんだ。

彼女は、恥ずかしそうにうつむいていた。

そんな彼女も、顔を上げ一人で笑いあつた。

「幸せ」を知った。

思つていた相手も、思つていてくれたと言う幸せを。

「俺」は、彼女にたくさんの幸せをあげたい。
愛す幸せも、愛される幸せも。

一人では、感じる事ができないたくさんのこと。

彼女を、一生愛していきたい。

彼女に、愛されていると知った今、

俺はこの世の誰よりも「幸せ」になった・・・。

最終回（後書き）

長い長い時間をかけた連載が終わりました。
なかなか連絡を取ることが難しく、なかなか先に進まなかつたのですが、やつとの事で終わりました。
感想、評価、または私たちの正体など、お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269a/>

俺の初恋

2010年10月9日13時04分発行